研究班番号【48】

翻訳の背景にあるもの

国語班：髙石一花、三木くるみ

要約

本研究の目的は、翻訳同士の間に生まれる違いは何によるものなのかを明らかにすることである。調査によって、時代による変化が大きいということがわかった。したがって本研究では、時代が進んで外国語や外国の文化に対する理解が深まるにつれて翻訳がより豊かになるということが結論付けられた。

1. はじめに

以前、不思議の国のアリスの日本語訳版を読んだ際に、ことばあそびが長々と注釈で説明されていたのを見て、音の響きやリズムを活かしたより良い翻訳が他にあるのではないかと疑問に思った。1つの同じ作品の翻訳であっても、翻訳ごとに違いが見られ別の作品のように感じられる。もちろん翻訳者が違えば翻訳に個性が出ることはあると思うが、それ以外の要因はないか興味を持った。そこで私達は時代の違いに注目し、翻訳された年代の違いからどのような変化が見られるのか、またその原因は何なのか、「不思議の国のアリス」を用いて研究することにした。この作品は、ダジャレや言葉遊びが駆使されており、日本では和訳だけでなく注釈書や解説書も数多く出版されている。

2. 研究手法

条件の異なる何冊かの不思議の国のアリスの日本語訳を用いて、それぞれの翻訳本に出る違いを時代による違いという観点から、外国の文化に関する単語の翻訳と言葉遊びの翻訳について調べた。

《研究1》

①原文「Alice's Adventures in Wonderland」から人物・単位・食べ物などの単語をピックアップした。

②①で取り上げた単語の様々な日本語訳を時代別に分けて比較した。

《研究2》

①原文「Alice's Adventures in Wonderland」から言葉遊びをピックアップした。

②翻訳された年代の異なる3つの日本語訳を用い、表現の違いを比較した。

3. 結果

《研究1》

まず、登場人物の名前について、明治・大正時代の翻訳では、主人公であるAliceが愛ちやん、Cheshire Catが朝鮮猫、Dinahが玉と表記されており、いかにも古風な日本らしい名前に変更されていた。昭和時代には、それぞれアリス、チェシャ猫、ダイナと訳されていた。

次に、単位について、明治・大正時代には、inchが寸、dollerが銭、literが丈などと表記されていたのに対し、昭和時代には全てインチ、ドル、リットルとカタカナ表記されていた。

そして、食べ物についてだ。明治・大正時代では、ORANGE MARMALADEが橙の砂糖漬(オレンジのさたうづけ)、Cherry tartが櫻桃の饅頭(さくらんぼのまんぢゆう)、Butterが牛酪(バター)などと表記されていたが、やはり人物や単位と同じように昭和時代には、それぞれオレンジマーマレード、チェリータルト、バターとカタカナ表記されていた。また、昭和以前にはまだ日本に広まっていなかったCustardなどの外国の食べ物は括弧付けで説明されていた。

明治時代から昭和初期にかけて、漢字の多用や旧仮名遣いのルビ、また丁寧な口調が特徴として見られた。内容としては、外国文化の説明を加えたり、日本人に馴染みのある言葉への置き換えが目立った。その後、昭和後期にかけては、カタカナ表記の増加や西洋文化の取り入れが見られた。

《研究2》

1つ目の言葉遊びは、ネズミがアリスに話の前置きをするシーンだ。「私のは長くて悲しい話（tale）なんだ。」「確かに長い尻尾（tail）ね。」という会話がある。これは、アリスがお話のtaleと尻尾のtailとを聞き間違えるという同音意義語を楽しむ言葉遊びとなっている。これを明治時代の翻訳では、「私のは長くて其上可哀想なの。」「長いの、さう。」と同音異義語のtailが混同していることがわからない訳となっている。次に、昭和初期の翻訳では「わたしのお話は長い、そして悲しいものなんです。」「全く長い尻尾だわ。」（英語で「おはなし」といふ言葉は「尻尾」といふ言葉と音が同じに聞えるのです。）と、直訳を

し、括弧内で言葉遊びについて説明している。そして昭和後期の翻訳は、「悲しいお話でなあ。」「長い尾は無しですって、あんなに長い尾なのに。」と、本来しっぽという意味であるtailを尾は無しという訳語に変えて、お話と発音の似た非常に上手な言葉遊びとなっている。

2つ目の言葉遊びは、アリスと偽ウミガメが海の学校について話しているシーンだ。「先生は年寄りのウミガメ(tatle)でした―私達は彼を陸ガメ(tortoise)と呼んでいました―」「彼は陸ガメではなかったのに、なぜ陸ガメと呼んだの？」「彼が私達に教えてくれた(taught us)ので、陸ガメと呼んだ。」という会話がある。これは、ウミガメのtatle、陸ガメのtortoise、私達に教えたのtaught us、これら3つの単語の同音異義語を楽しむ言葉遊びだ。明治時代の翻訳では、「校長先生は年老いた海龜でした―私どもは其の先生を龜ノ子先生と呼び慣らしてゐました。」「何故龜ノ子先生ッて呼んだの、然うでないものを？」と、言葉遊びに気づいていないのか、翻訳を諦めたのか、言葉遊びを無視した翻訳となっている。そして、昭和初期の翻訳では「先生は年よりの海ガメで―わたしたちは正覚坊先生(正覚坊は海ガメの一種)と言っていました。」「小学校の先生だから正覚坊先生と言ったんだよ。」と陸ガメの要素が消えていますが、明治の翻訳と比べると工夫の効いた翻訳になっています。最後に、昭和後期では「先生は年をとった海ガメじゃった―わしらは、いつもリクガメ先生って呼んでおったがな。」「リクつ(理屈)を教えてくれたカメ先生だから、そう呼んでいたんじゃ。」と、理屈を掛詞としてウミガメとリクガメを上手く繋げていて、原文から離れすぎない上手な翻訳になっていた。

このように、明治時代から昭和後期まで、言葉遊びを無視する訳、言葉遊びの内容について注釈で説明する訳、言葉遊びを創作する訳、というふうに段階を踏んで現在の翻訳に近づいていることがわかる。西洋文化が広まっていない昔では、他文化をいかに違和感なく日本文化と結び付けられるかが重要視されていた。現代に近づくにつれて、原本と近しく読みやすい翻訳、言葉遊びの面白みを重んじる訳が多くなっていた。

4. 考察

西洋文化が一般的でなかった明治では、多文化をいかに違和感なく日本文化と結びつけて翻訳するかが重要視されていたことが窺える。一方で、ある程度他文化が理解された現代との物語の印象が変わってくるのは当然のことであろう。昭和後期にかけてカタカナ表記が増加し言葉遊びの訳が重んじられるようになったのは、第二次世界大戦を経て西洋化が進み英語が日本人にとって馴染みが深くなったからであると考えられる。

また、翻訳本は最近のものになるにつれ、言葉遊びの面白みを重んじる訳が多いという印象を受けた。時代の移り変わりの影響だけでなく、翻訳者同士で他人との差・自分なりの翻訳を意識することによって、一つの原作から様々な異なる解釈がされる。特に、音の響きやリズムを楽しむことばあそびは、意味を取って音を捨てる翻訳と対極の位置にあると考えられる。そのため、ことばあそびの翻訳は非常に難易度の高いことだが、それと同時にあらゆる翻訳を自由に作り出すことができる。

5. 結論

日本人の外国語に対する理解が深まることで、翻訳はより本文の意図を汲み取った訳になっていくと言える。また、外国文学の翻訳を読むことは、その時代における外国と日本の文化面での関わりを読み解く助けになるのである。

6. 参考文献

丸山英観訳「愛ちやんの夢物語」(1910年 2月 内外出版協会)
芥川龍之介・菊池寛訳「アリス物語」(1927年 11月 興文社)
矢川澄子訳「不思議の国のアリス」(1994年 2月 新潮社)